

第39回 市川市行徳臨海部まちづくり懇談会

日時 平成29年1月26日(木)
10:30~12:00
会場 南行徳市民談話室 3階

次 第

I. 開 会

II. 報 告

1. 市川漁港整備事業について

(1) 漁港整備工事について 資料 1-1

(2) 護岸補強工事について 資料 1-1

(3) モニタリング調査について 資料 1-2

2. 三番瀬再生計画について 資料 2

III. 閉 会

IV. その他

1. 今後の市川市行徳臨海部まちづくり懇談会について

第39回 市川市行徳臨海部まちづくり懇談会 出席者名簿

平成29年1月26日(木)

分野	氏名	所属・専門	出欠
学識者	西村 幸夫	東京大学 工学部 教授	○
	風呂田 利夫	東邦大学 名誉教授	○
自治会	金井 修次	行徳地区自治会連合会 会長	○
	歌代 素克	南行徳地区自治会連合会 前相談役	○
市民団体	佐野 郷美	市川緑の市民フォーラム 事務局長	×
	安達 宏之	特定非営利活動法人 三番瀬環境市民センター 広報	×
	丹藤 翠	行徳まちづくりの会 代表	○
	鈴木 晃夫	特定非営利活動法人 行徳野鳥観察舎友の会 理事長	○
漁組	中島 健蔵	市川市行徳漁業協同組合 前専務理事	○
	木村 和秋	南行徳漁業協同組合 専務理事	×
企業・関係機関	出口 健	市川市塩浜協議会 事務局長	×
	三原 一洋	社団法人 市川青年会議所	×
	岩本 伸夫	独立行政法人 都市再生機構 東日本都市再生本部 事業企画部 事業企画第2グループリーダー	○
	佐藤 尚美	市川市 副市長	×
市民	川口 勲	市川市民	○

(敬称略)

市川漁港区域内における 工事の実施状況

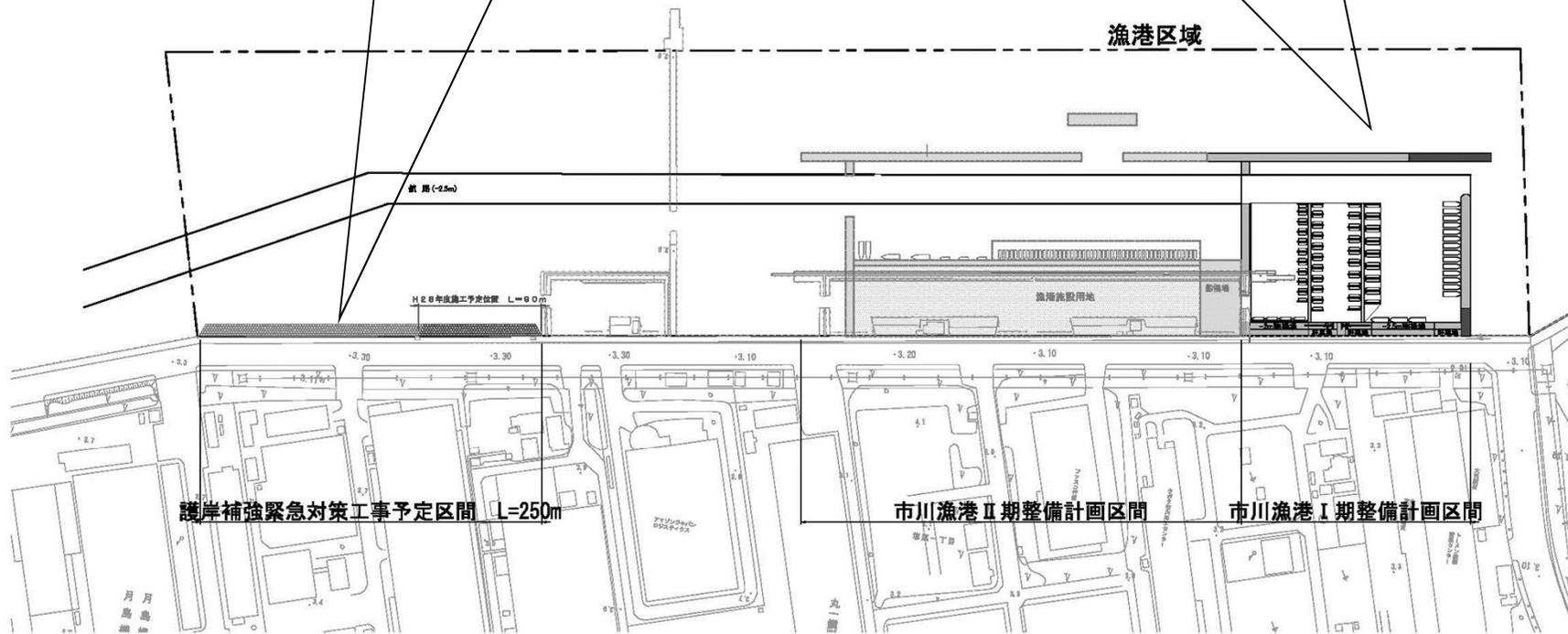
平成29年1月

行徳支所 地域整備課

市川漁港区域内における工事

市川漁港護岸
補強緊急対策事業

市川漁港整備事業



1. 市川漁港整備事業の実施状況

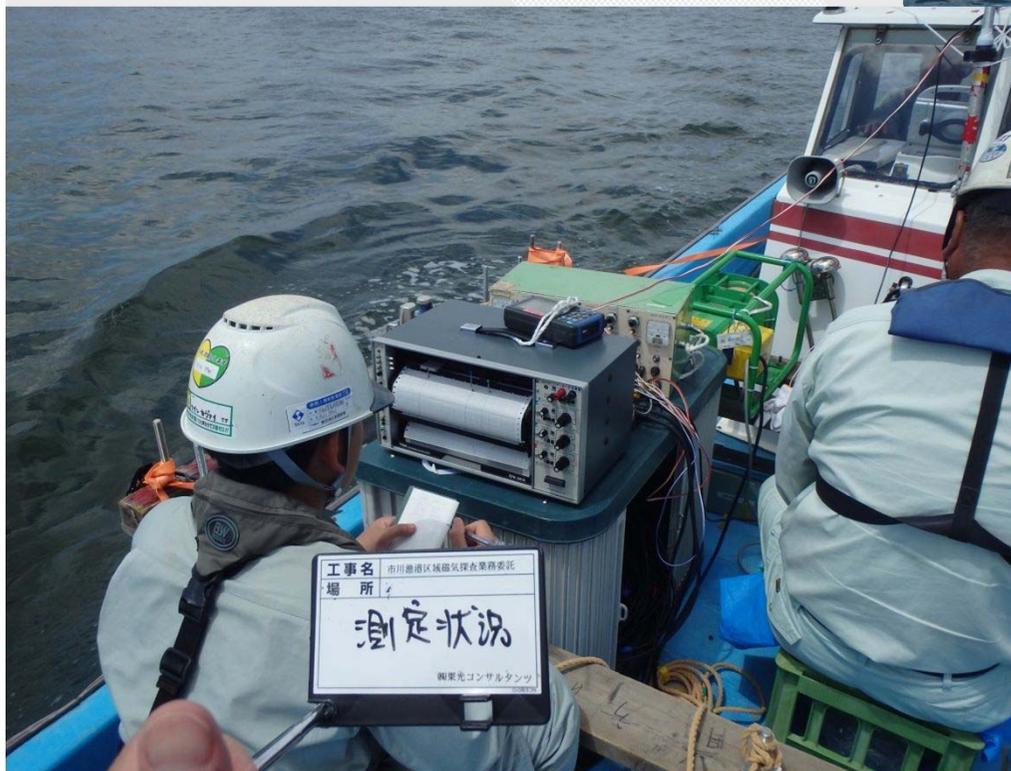
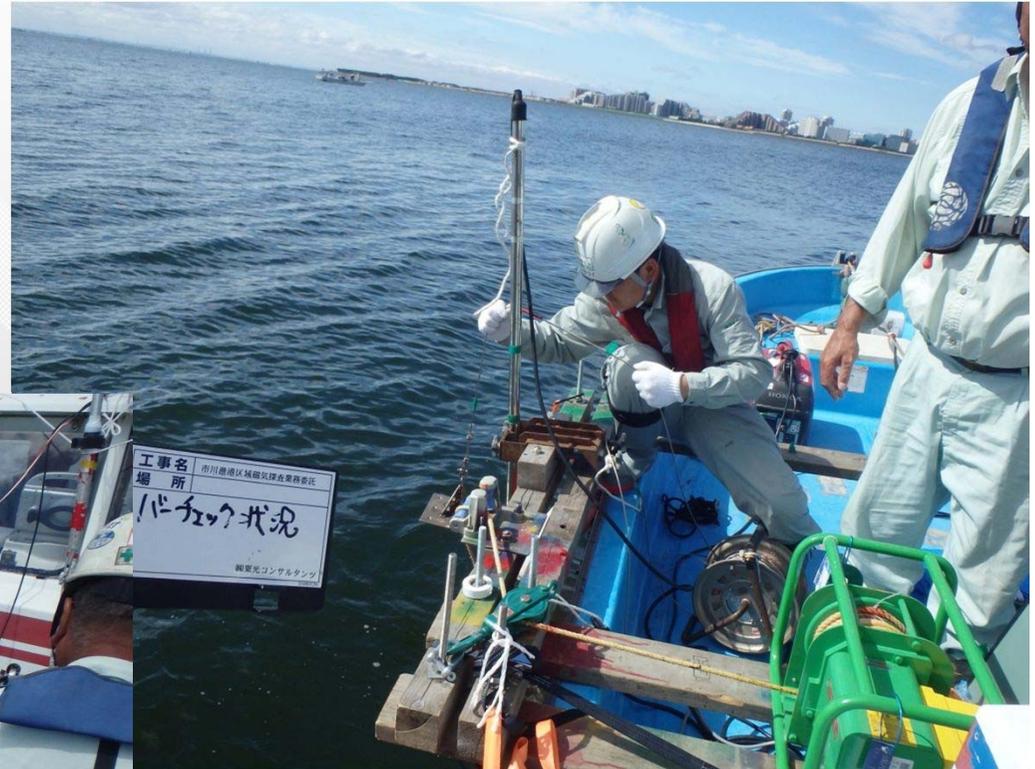
H28年度

- 市川漁港区域磁気探査業務委託（調査完了）
- 市川漁港整備に伴うモニタリング調査業務委託（現場調査終了）
- 市川漁港浚渫工事（施工完了）
- 市川漁港ジャケット製作工事（施工中）
- 市川漁港外郭施設工事（施工中）

市川漁港区域磁気探査業務委託

- 調査内容

工事区域内における爆発物等の危険物の有無を調査

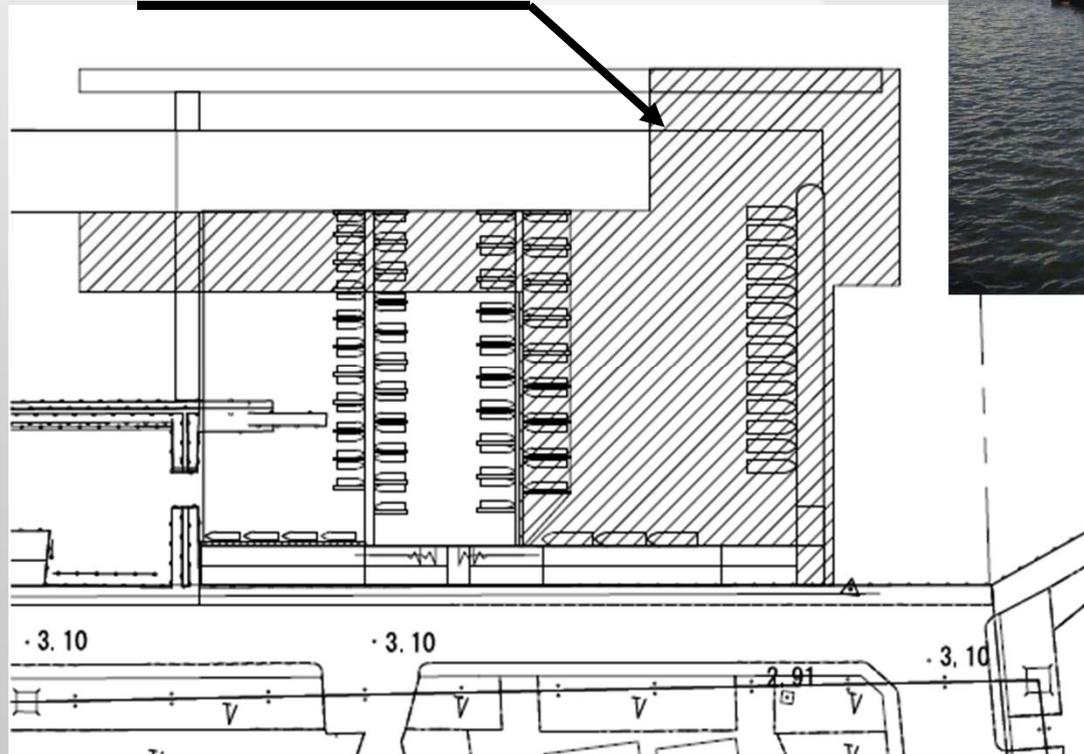


- 調査結果
爆発物等の危険物なし

市川漁港浚渫工事

- 工事概要
浚渫量 約25,000 m³

H28施工箇所



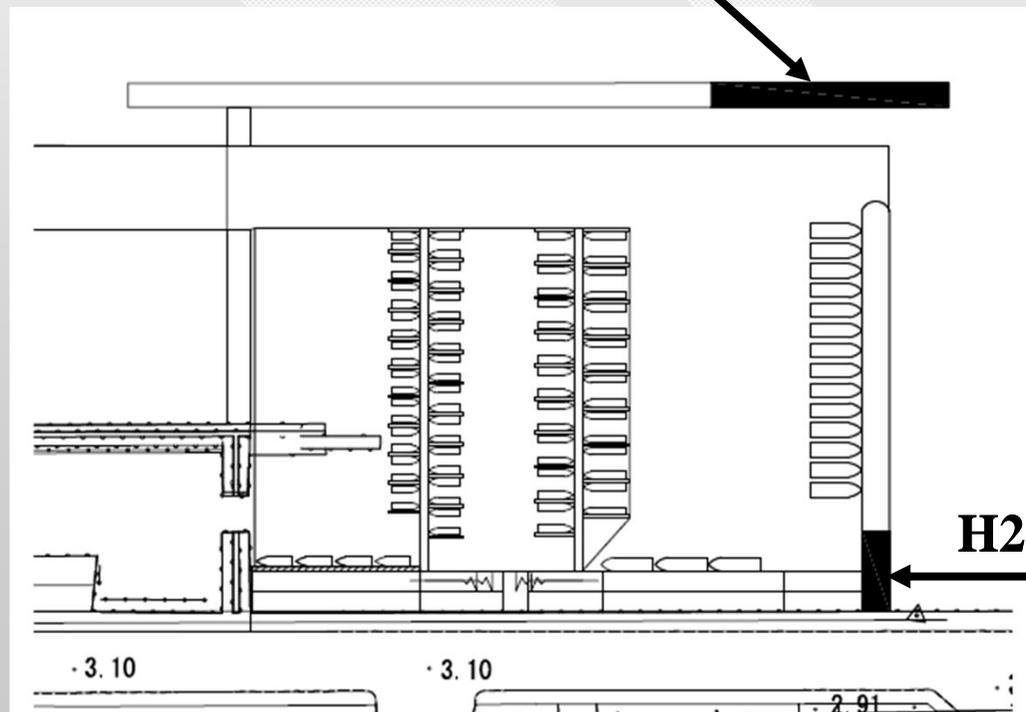
市川漁港ジャケット製作工事

市川漁港外郭施設工事

- 工事概要

防波堤 58.5m
突堤 20.0m (鋼管杭のみ)

H28施工箇所 (防波堤)

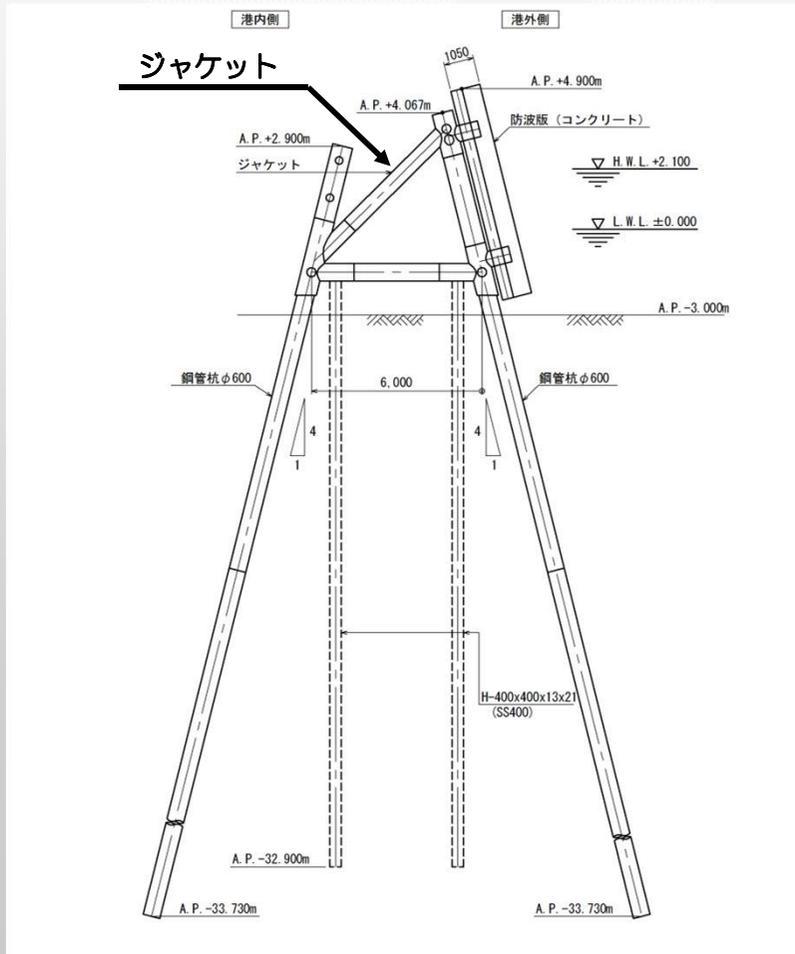


H28施工箇所 (突堤)

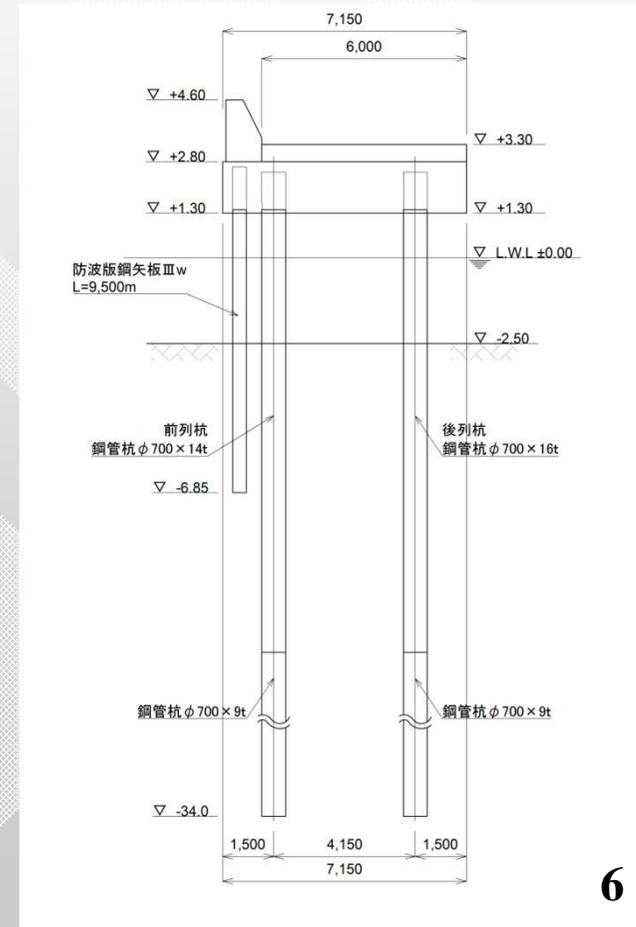
市川漁港ジャケツト製作工事

市川漁港外郭施設工事

防波堤標準図

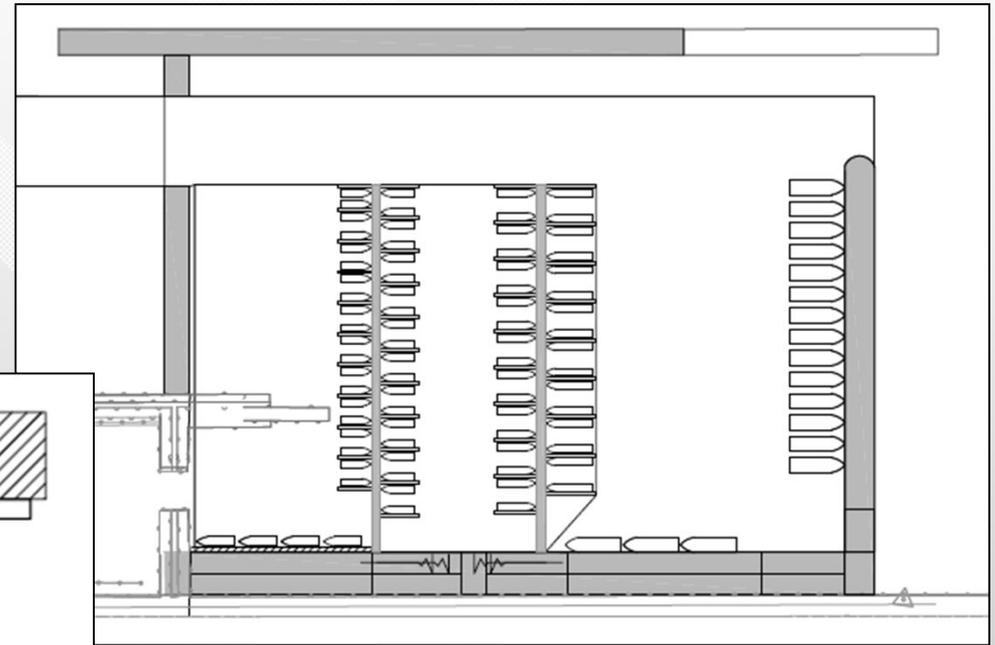


突堤標準図

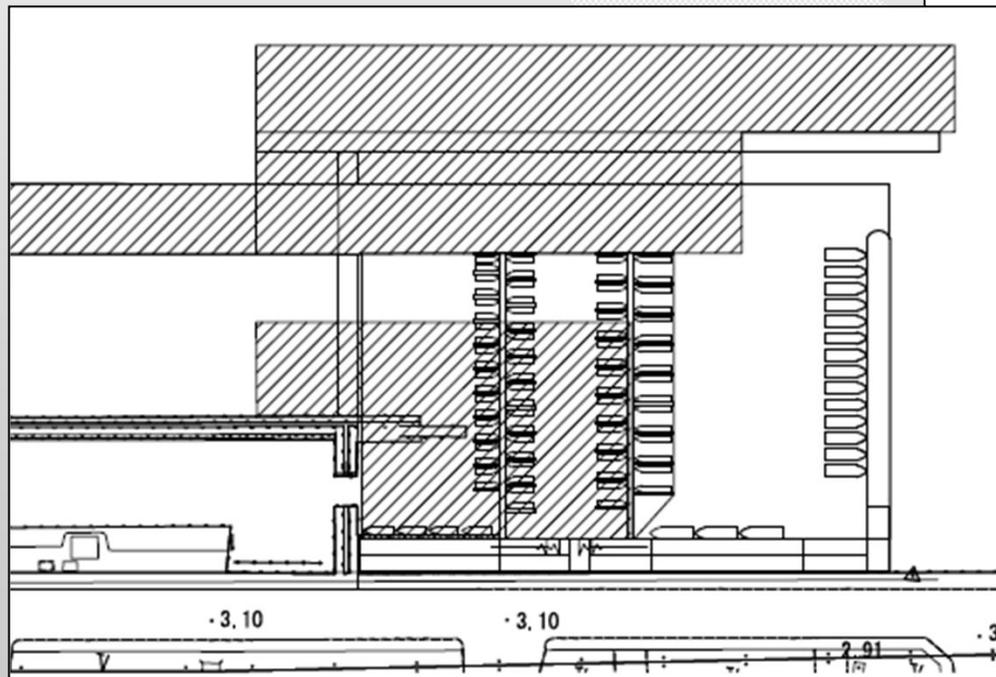


H29年度以降の予定工事

H29以降施工予定箇所



H29以降浚渫予定箇所

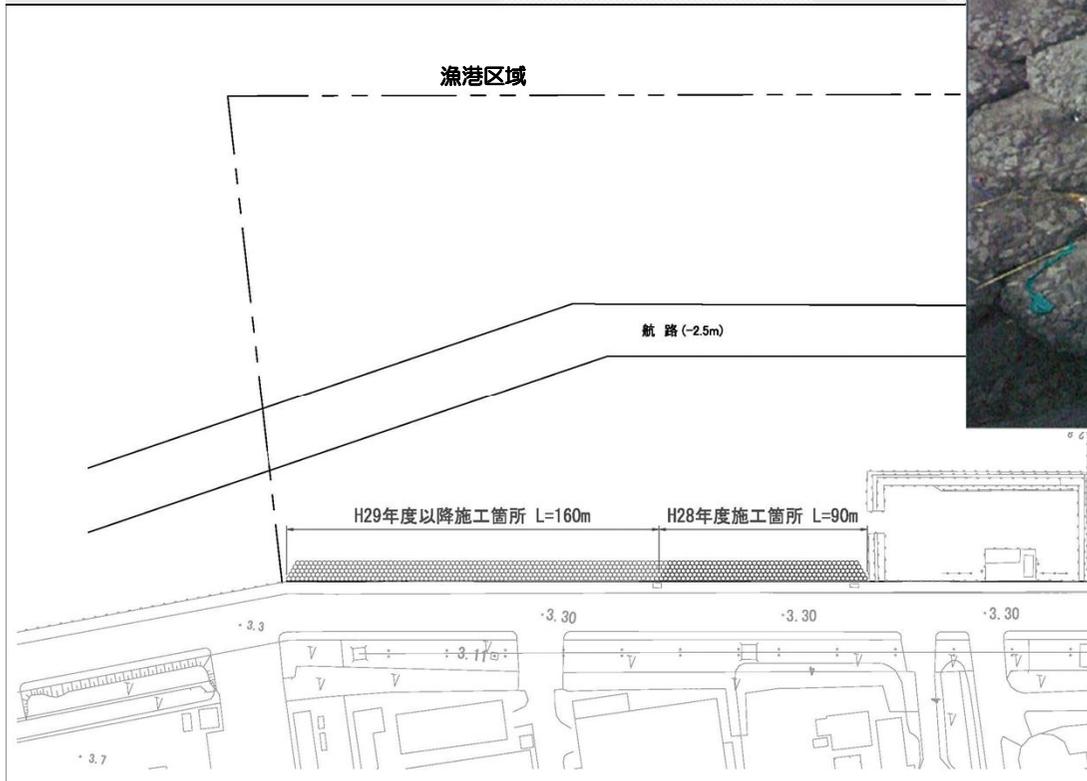


2. 市川漁港護岸補強緊急対策事業の 実施状況

H28年度

工事施工延長（袋詰玉石） 90m

H28施工箇所



平成28年度 市川漁港整備に伴うモニタリング調査結果について（報告）

1. 漁港整備事業の概要

(1) 事業の目的

市川漁港は、市川Ⅱ期埋立計画を前提として整備されたことから狭隘で十分な漁港施設用地もないため、登録漁船数 290 隻の半数以上は漁港以外に係留しており、漁業の活動拠点としての機能を十分に果たすことができていない。さらに、昭和 46 年の完成から約 40 年が経過し、防波堤などの外郭施設の老朽化が著しい状況にある。

このような状況から、外郭施設、係留施設及び輸送施設を整備し、安全性の確保や漁業活動の効率化による生産コストの縮減を図る。

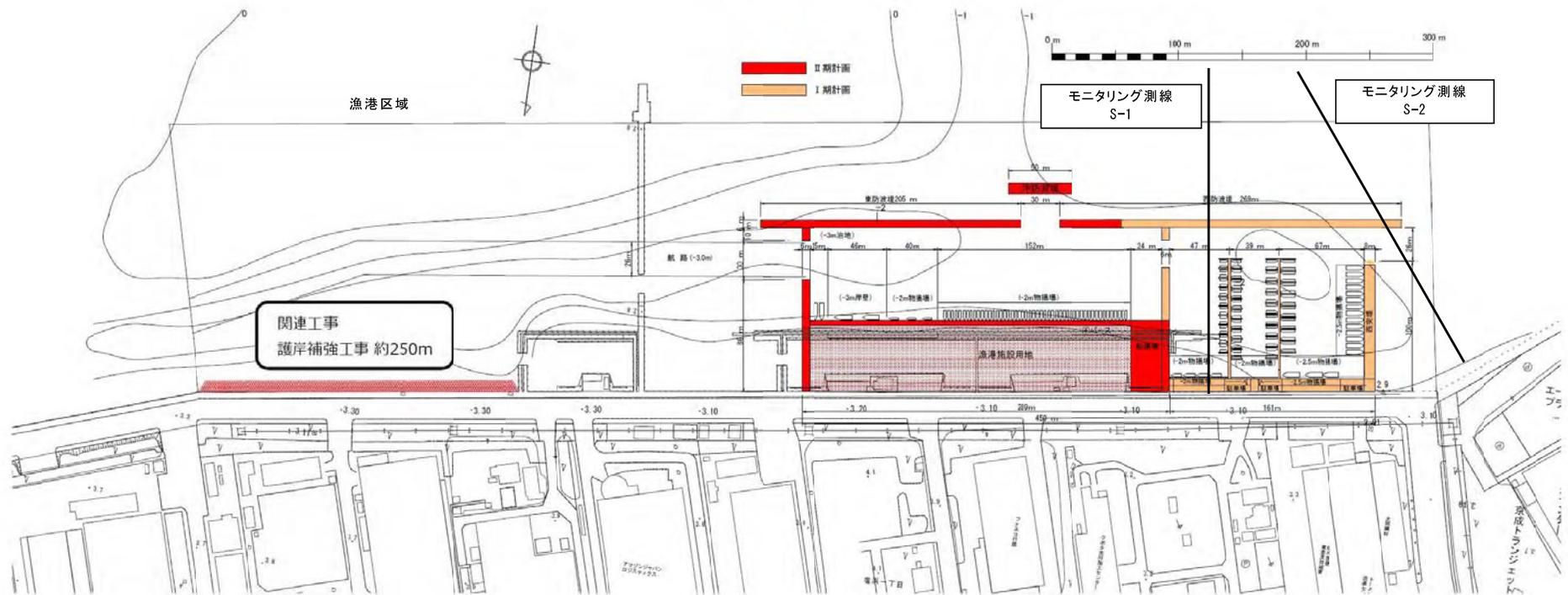
(2) 整備の内容

本事業は漁業活動が営まれている区域での工事となり、また、他の海上工事、漁業活動状況、海難防止対策等の施工条件があることから、工事期間が長期となる見込みである。

このため、事業期間をⅠ期、Ⅱ期に分けて事業を実施する。第Ⅰ期事業の整備は現市川漁港区域内で、漁港の西側へ整備する。

- ・第Ⅰ期事業計画（平成27年6月 事業基本計画について水産庁、千葉県より承認済）
 - 係留漁船数 88 隻
 - 防波堤 約366m（ジャケット式（傾斜板式）、杭式）
 - 係留施設 約395m（杭式）
 - 駐車場 約290 m²を整備（杭式）
 - 整備費 約 18 億円

市川漁港 全体計画平面図



2. モニタリングについて

(1) モニタリングの目的

市川漁港整備事業における環境負荷をモニタリングにより分析し、工事実施における事業管理手法につなげるにより、工事中の環境負荷を低減するとともに工事後における事業区域内及び周辺の環境を保全する。

(2) 環境影響に関する予測評価項目

本事業により想定される環境影響については、下記のとおり想定。

環境要素	環境要因の区分	事業により想定される環境影響
地形	整備後	流れの変化や反射波により対象海岸域の地形変化の可能性がある。
水質	工事中	工事の実施により濁りが発生し、海生生物が影響を受ける可能性がある。
底質	工事中	工事の実施により濁りが発生し、海生生物が影響を受ける可能性がある。
海生生物	工事中	工事の実施により、海生生物の一時的な減少が考えられる。
	整備後	地形変化や流れの変化により海生生物が影響を受ける可能性がある。

(3) 調査概要

調査回数： 年2回（春夏期、秋冬期）

調査範囲： 500m×2測線

調査項目： 地形、水質、底質、海生生物

調査期間： 工事着手前から完了後まで（平成28～33年度）

(4) 判断基準

環境要素	判断地点	判断基準
地形	200m地点 (防波堤外側)	施工前の海底面に対して±0.5m以上変化しないこと (浚渫部は除く)
水質	200m地点 (防波堤外側)	浮遊物質量(SS)において人為的に加えられる懸濁物質が 1.0mg/Lを超えないこと。
底質	200m地点 (防波堤外側)	泥分が40%を超えないこと。

地形測量



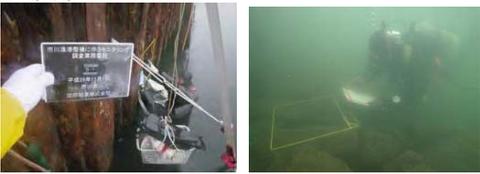
水質調査



底質調査



生物調査

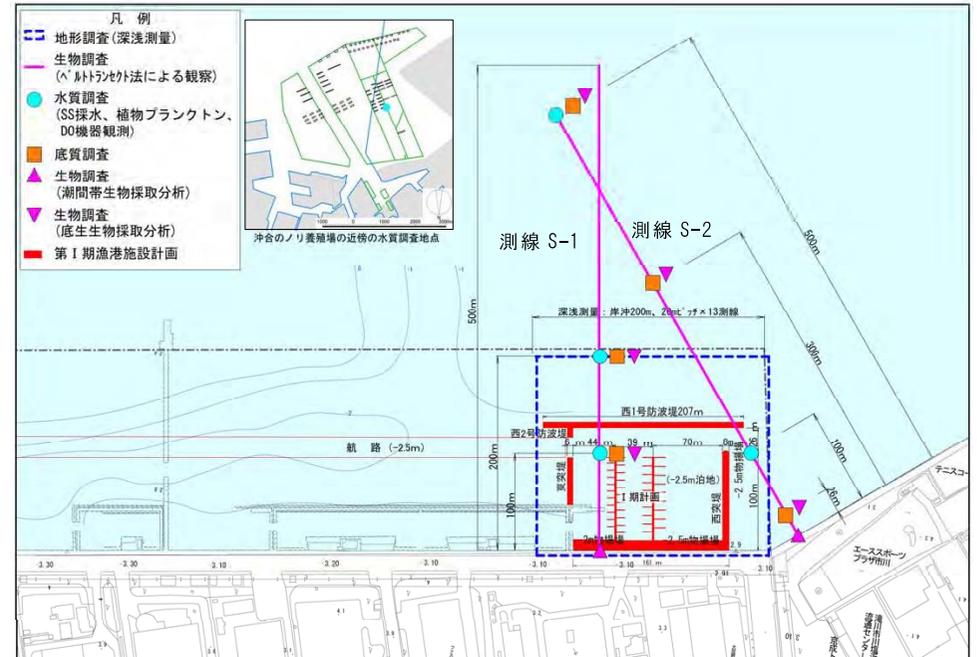


モニタリング調査実施状況

3. 平成28年度調査計画

調査計画一覧表（平成28年度）

調査項目	調査時期	調査の目的	調査方法	数量（調査1時期あたり）
地形測量	春夏期(6月頃) 及び 秋期(10,11月頃)	海生生物生息 基盤である地 形の施工前後 の変化状況の 把握	深淺測量、汀線測量	第1期計画範囲の13測線×延長200m=2,600m 測線S-1、S-2の2測線×延長500m=1,000m 計3,600m
水質調査	春夏期(6月頃) 及び 秋期(10,11月頃)	施工中の濁り による水域環 境への影響の 把握	採水(浮遊物質SS、植物プラン クトン)分析及び、機器観 測(水温、塩分濃度、濁 度、DO)	測線S-1上の100m、200mの2地点 測線S-2上の100m、500mの2地点 沖合のノリ養殖場の近傍1地点 計5地点
底質調査	春夏期(6月頃) 及び 秋期(10,11月頃)	海生生物生息 基盤である底 質の施工前後 の変化状況の 把握	採泥器による採取・分析 分析項目：粒度組成、COD、 全窒素、全リン、全硫化物、 強熱減量	測線S-1上の100m、200mの2地点 測線S-2上の26m、300m、500mの3地点 計5地点
生物調査	春夏期(6月頃) 及び 秋期(10,11月頃)	施工前後の海 生生物生息状 況の変化の把 握	①ベルトランセット法による観察 ②潮間帯生物採取・分析 ③採泥器による底生生物採取 分析	測線S-1、S-2の2測線×延長500m=1,000m 測線S-1及びS-2の護岸直下2箇所、高潮帯、 中潮帯、低潮帯の各3地点、計6地点(検体) 測線S-1上の100m、200mの2地点 測線S-2上の26m、300m、500mの3地点 計5地点(検体)



平成28年度モニタリング調査位置図

4. 調査結果

(1) 地形

1) 地形調査結果

測線 S-1、S-2 の測量結果を図 1 に示す。

測線 S-1 (500m) の地形は、鋼矢板式直立護岸(0m)から鋼矢板壁の防波堤(40m)まで、漁港への入出港のための航路地形(最深値-1.5m)が見られる。防波堤のすぐ沖側から深くなり 60~150m くらいまで滞筋となっている。およそ 150~160m で浅くなり、160m より 500m までの沖合は緩やかな上り勾配で浅くなっている。

測線 S-2 (500m) の地形は、石積護岸のり先から 100m まで滞筋(最深値-1.8m)が見られる。100~180m については春夏期(平成 28 年 6 月)は緩やかな下り勾配で深くなっており、秋期(平成 28 年 10, 11 月)は 100~150m の範囲で漁港工事に伴う浚渫が行われたため、深くなっている。180m より沖合は緩やかな上り勾配で浅くなっている。

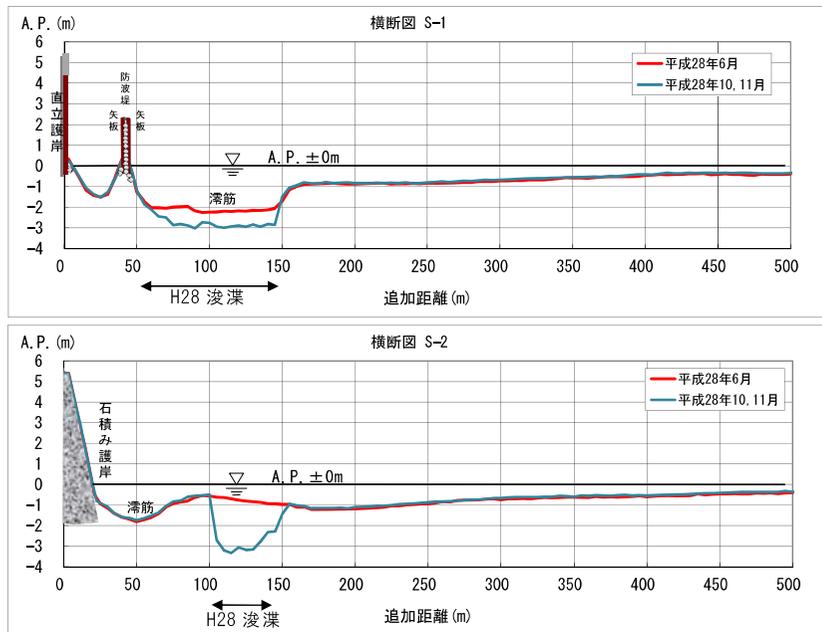
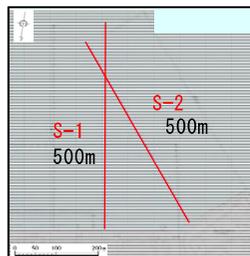


図 1 地形調査結果



2) 地形変化の状況

春夏期(平成 28 年 6 月)と秋期(平成 28 年 10, 11 月)の 2 測線における地形調査結果より、地形変化量を図 2 に示す。

平成 28 年 7、8 月に、漁港工事に伴う浚渫工事を行い、A.P. -3m 程度まで掘り下げたことから、浚渫箇所は従前の地盤高(平成 28 年 6 月)から、測線 S-1 で-0.4~-0.9m 程度、測線 S-2 で-1.4~-2.6 m 程度深くなった。

それ以外の箇所は、春夏期(平成 28 年 6 月)と秋期(平成 28 年 10, 11 月)で-0.1~+0.2m 程度の変化であり、著しい地形変化はみられない。

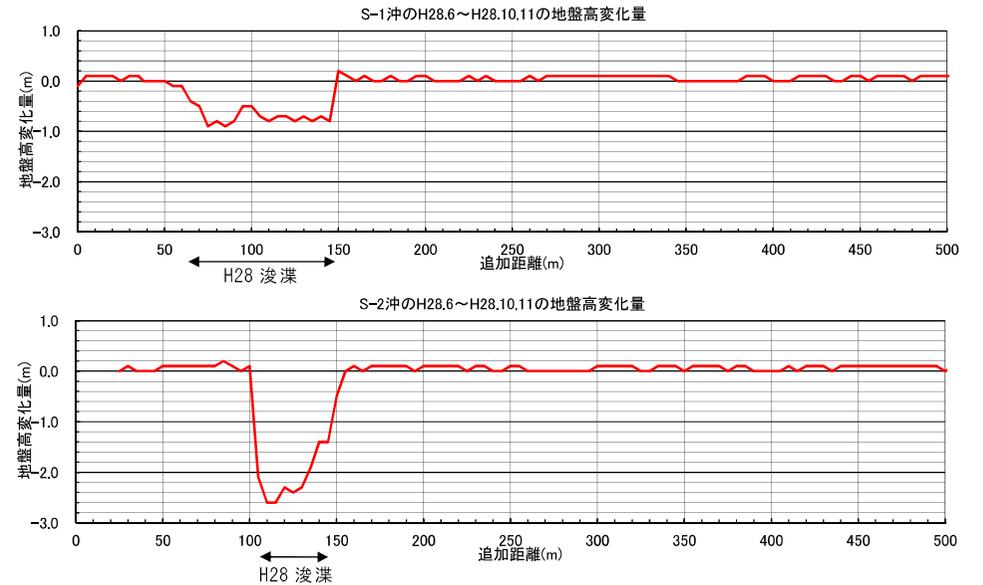


図 2 地形変化の状況
(平成 28 年 6 月(工事前)と平成 28 年 10, 11 月(浚渫後)の比較)

(2) 水質

1) 浮遊物質 (SS)

水質分析結果として、浮遊物質 (SS) の調査結果を図3に示す。

春夏期は3~6mg/L、秋期は4~5 mg/Lの範囲であった。地点間での差は小さい。

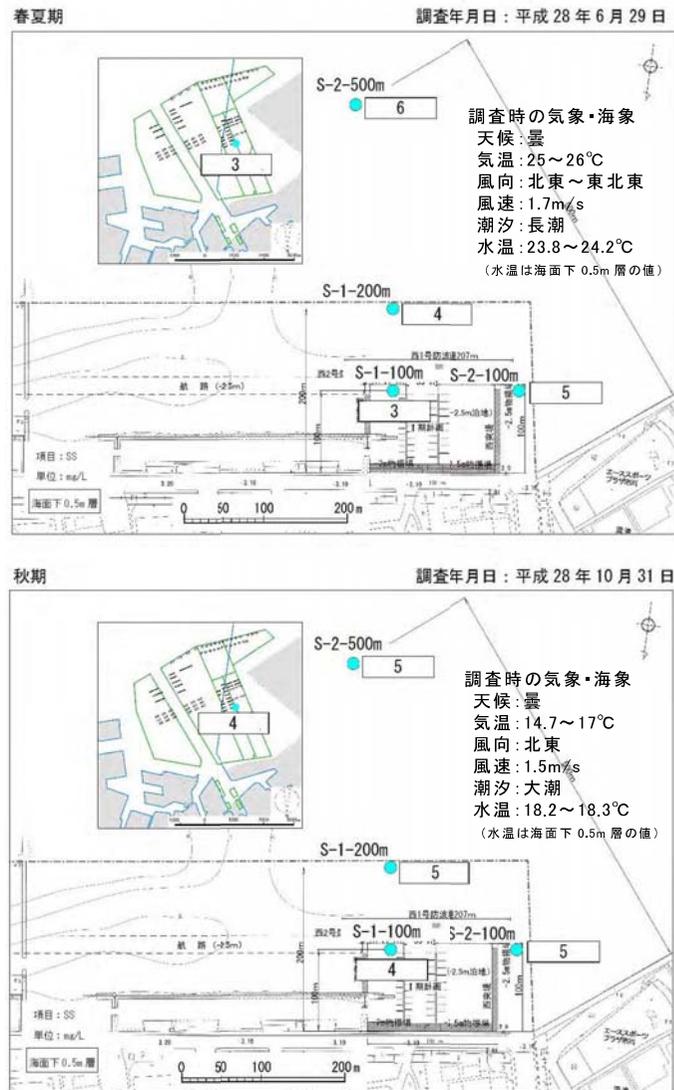


図3 浮遊物質 (SS) 分析結果

2) 溶存酸素量 (DO)

水質分析結果として、溶存酸素量 (DO) の調査結果を図4に示す。

春夏期は3.7~5.2mg/L、秋期は5.7~6.3mg/Lの範囲であった。地点間での差は小さい。

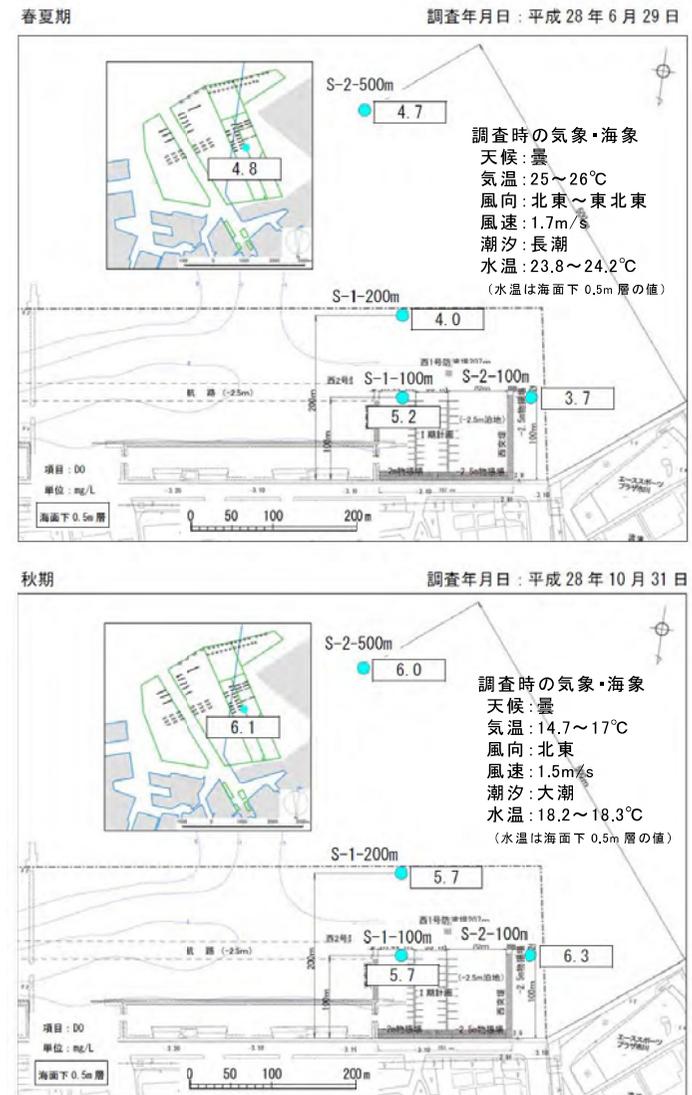


図4 溶存酸素量 (DO) 分析結果

3) 植物プランクトン※

植物プランクトンは、水中の栄養塩類を吸収して光合成を行うが、工事の実施により濁りが発生することで栄養塩類が供給され、それに伴い出現状況が変化し、水質を悪化させる可能性が考えられる。

植物プランクトンの調査結果より、地点毎の細胞数及び優占種の出現状況を円グラフで図5に示す。

細胞数は、春夏期は1,098,400～2,267,100細胞/L、秋期は130,800～398,300細胞/Lの範囲にあった。地点間で大きな差は見られない。

優占種は、春夏期はクリプト藻のクリプトモナス目 (Cryptomonadales) や珪藻のタラシオシーラ科 (Thalassiosiraceae) が優占し、秋期はクリプト藻のクリプトモナス目 (Cryptomonadales)、珪藻のキートケロス・デビリス (*Chaetoceros debilis*) やスケルトネマ属 (*Skeletonema* sp.) が優占した。特定のプランクトンが異常発生するような状況は確認されていない。また、確認された種は東京湾で普通にみられる種である。

植物プランクトンの細胞数、優占種の調査結果から、富栄養化といった水質の変化は生じていないものと考えられる。

※植物プランクトンとは
水域で自分自身で移動がまったくないかあっても非常に弱く水の力に逆らって移動せず浮遊生活をおくる生物のうち、光合成によって栄養を得ているもの。

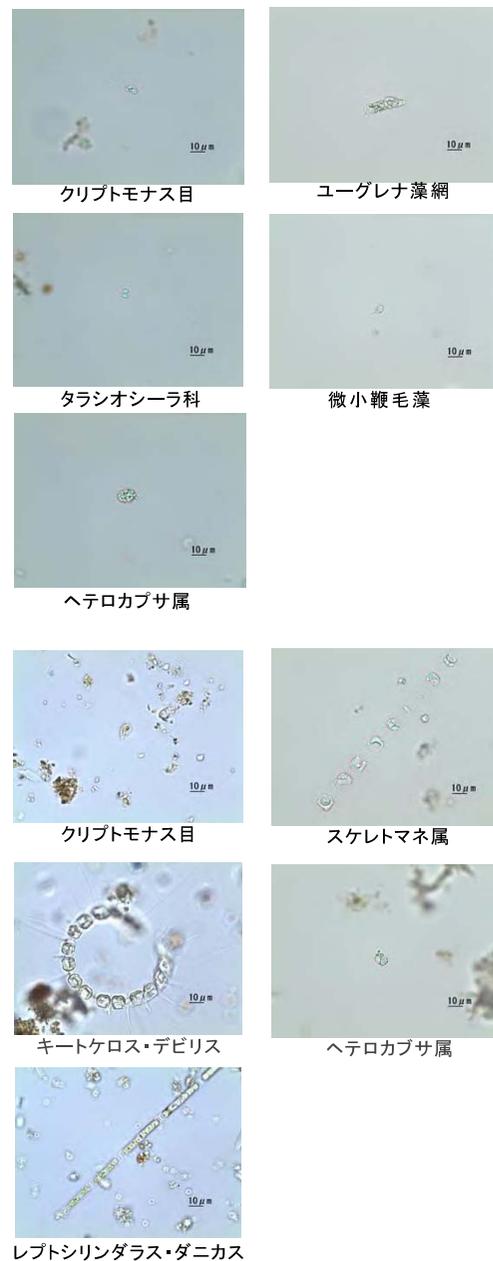
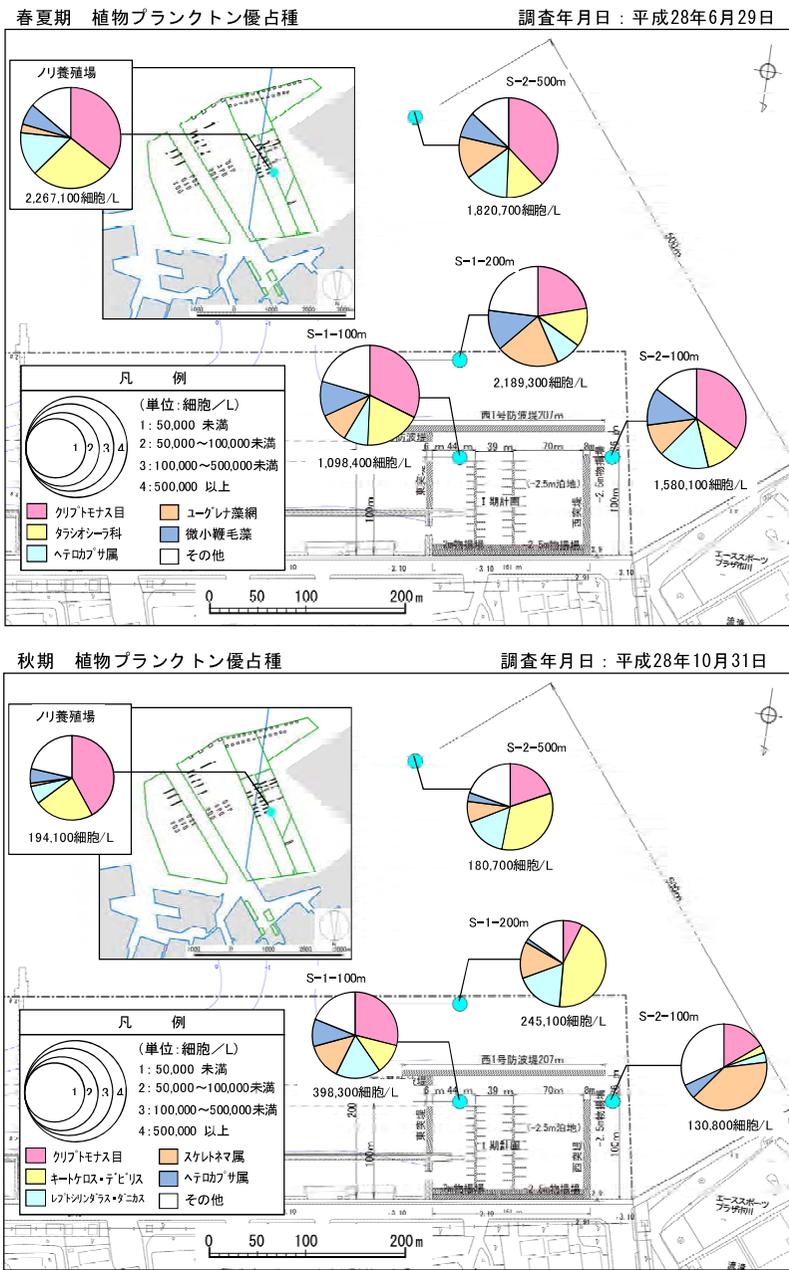


図5 植物プランクトンの優占種の出現状況

(3) 底質

1) 粒度組成

測線 S-1、S-2 における底質の粒度組成の分析結果を図 6 に示す。

測線 S-1 の滞筋部にあたる沖合 100m はシルト・粘土分が約 8~9 割であり泥質、その他の地点は砂分が 7~9 割以上を占める。

浚渫が行われた測線 S-1 の沖合 100m は、春夏期に比べて秋期はシルト・粘土が 10%程度低下し、その他の地点は著しい粒度組成の変化は見られない。

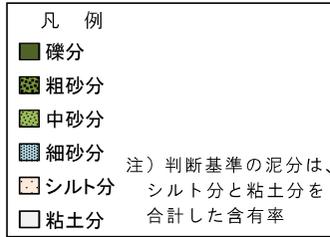
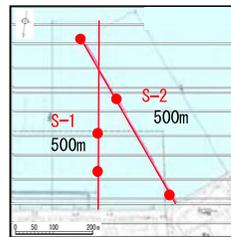
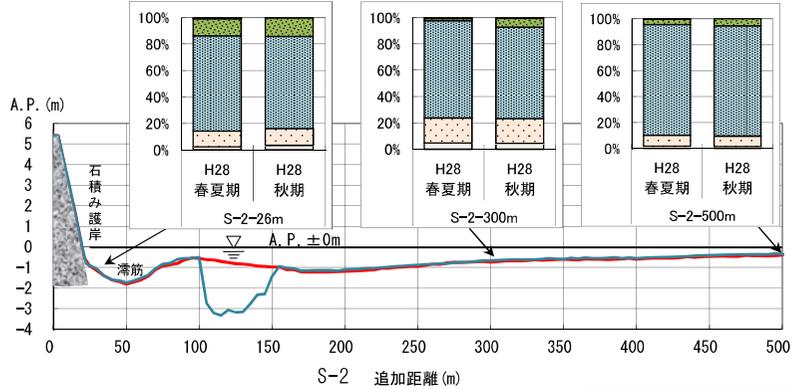
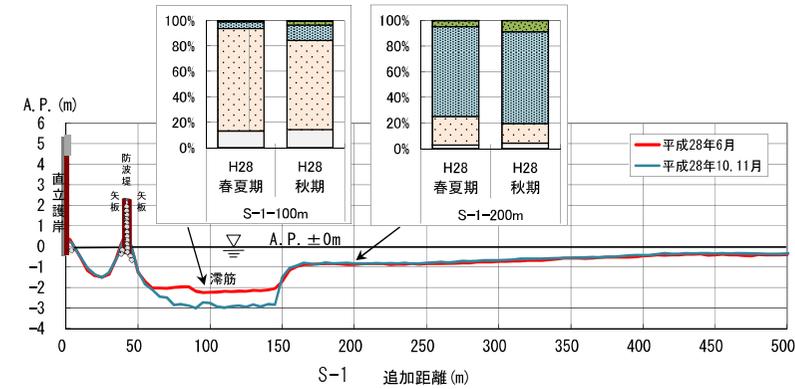


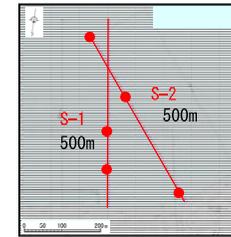
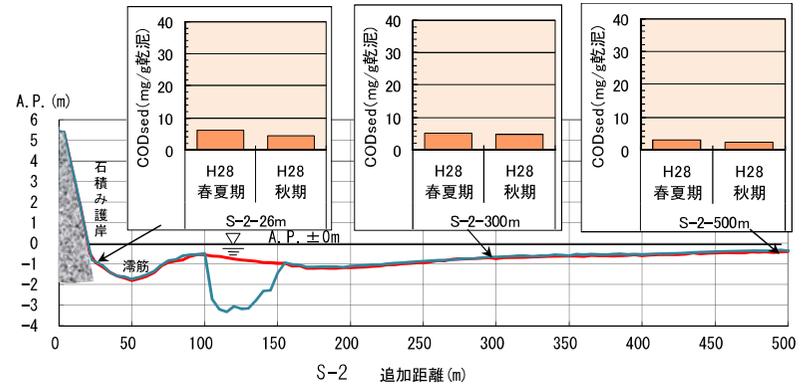
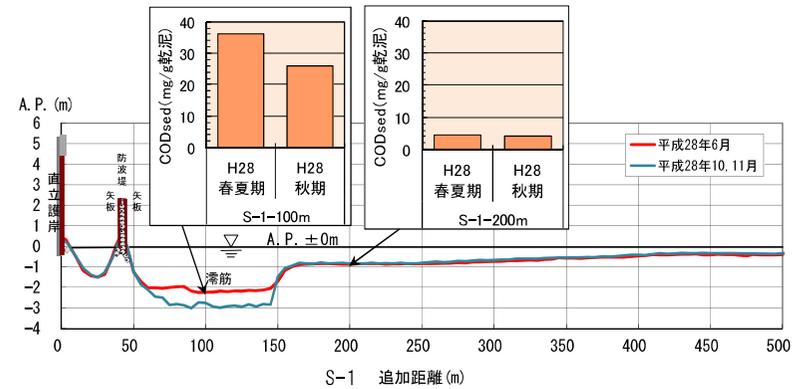
図 6 粒度組成の分析結果

2) COD※ (化学的酸素要求量)

測線 S-1、S-2 における底質の COD の分析結果を図 7 に示す。

測線 S-1 上の沖合 100m は 26~36mg/g、他の地点は 2.6~6.2 mg/g あった。

浚渫が行われた測線 S-1 上の沖合 100m では春夏期に比べて秋期は COD 含有量が低下し、その他の地点は著しい変化は見られない。



※底質の COD とは
底質中の有機物含量の指標の一つ。酸化剤で化学的に酸化したときに消費される酸素量を表す。数値が大きいほど底質中の有機物質の量が多いことを示す。

図 7 COD の分析結果

(4) 海生生物

1) 観察結果に基づく出現種の確認状況

測線 S-1、S-2 における海生生物の観察結果を表 1 に示す。

春夏期（平成 28 年 6 月）は、測線 S-1 は植物 7 種、動物 35 種、測線 S-2 は植物 6 種、動物 27 種が確認された。

秋期（平成 28 年 10、11 月）は、測線 S-1 は植物 5 種、動物 27 種、測線 S-2 は植物 6 種、動物 28 種が確認された。

各測線の追加距離 0～250m の範囲における生物確認状況の模式図を次頁以降に示す。

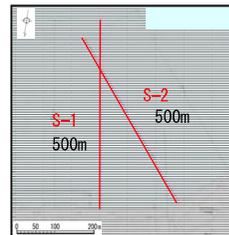
測線 S-1 では既設の護岸直下及び防波堤の壁面にはタテジマイソギンチャク、イボニシ等、沖側の砂底には潜砂性二枚貝のホンビノスガイやアサリが広範囲に確認された。

測線 S-2 では石積み護岸部にはタテジマイソギンチャクやホウキムシ科等、沖側の砂底には潜砂性二枚貝のホンビノスガイやアサリが確認された。

浚渫が行われた測線 S-1 の追加距離 65～150m、測線 S-2 の追加距離 105～145m では、秋期（平成 28 年 10、11 月）は浚渫直後の調査にあたり、ほとんど生物は確認されなかった。

表 1 海生生物の確認状況（沖合い 500m までの観察結果）

植物				動物			
No.	門	出現種	S-1		S-2		
			H28.6	H28.10-11	H28.6	H28.10-11	
1	黄色植物	珪藻綱	○	○			
2	緑藻植物	アオノリ属			○	○	
3		アオサ属	○	○	○	○	
4		シオグサ属		○	○	○	
5		ハネモ属			○	○	
6		ミル	○				
7		緑藻綱	○	○			
8	紅藻植物	インダンソウ	○				
9		オゴノリ属	○	○	○	○	
10		イトグサ属			○	○	
11		イギス科	○				
		総種類数	7	5	6	6	
No.	門	出現種	S-1		S-2		
			H28.6	H28.10-11	H28.6	H28.10-11	
1	海綿動物	海綿動物門		○			
2	刺胞動物	ヒドロ虫綱	○		○		
3		タテジマイソギンチャク	○	○	○	○	
4		インギンチャク目	○	○	○	○	
5	環形動物	スゴカイイソメ		○			
6		ケヤリムシ科	○	○		○	
7		カンザシゴカイ科	○		○	○	
8		多毛類卵塊	○		○		
9	触手動物	ホウキムシ科	○	○	○	○	
10	軟体動物	ヒザラガイ綱	○				
11		タマキビガイ		○	○	○	
12		アラレタマキビ	○	○	○	○	
13		アカニシ	○				
14		イボニシ	○	○	○	○	
15		アラムシロガイ	○	○	○	○	
16		ミノウミウシ類	○		○		
17		サルボウガイ	○	○	○	○	
18		マガキ	○	○	○	○	
19		カガミガイ		○			
20		ホンビノスガイ	○	○	○	○	
21		アサリ	○	○	○	○	
22		シオフキガイ	○	○		○	
23		ヒメシラトリガイ		○			
24	節足動物	イワフジツボ	○		○	○	
25		シロスジフジツボ				○	
26		フナムシ属	○		○	○	
27		スジエビ属	○	○	○		
28		異尾垂目(ヤドカリ類)	○	○	○	○	
29		インガニ	○	○		○	
30		タノケフサイソガニ	○		○	○	
31		イワガニ科	○	○			
32	原索動物	カタユウレイボヤ	○		○	○	
33		マンハッタンボヤ		○	○	○	
34		シロボヤ	○	○	○	○	
35	脊椎動物	アカエイ	○				
36		ツバクロエイ	○				
37		コチ科	○			○	
38		トサカギンボ				○	
39		インギンボ		○			
40		イダテンギンボ	○				
41		ドロメ	○				
42		ヨウジウオ科			○		
43		スジハゼ		○			
44		マハゼ	○	○	○	○	
45		チチブ属	○	○	○	○	
46		シマハゼ類	○		○	○	
		総種類数	35	27	27	28	



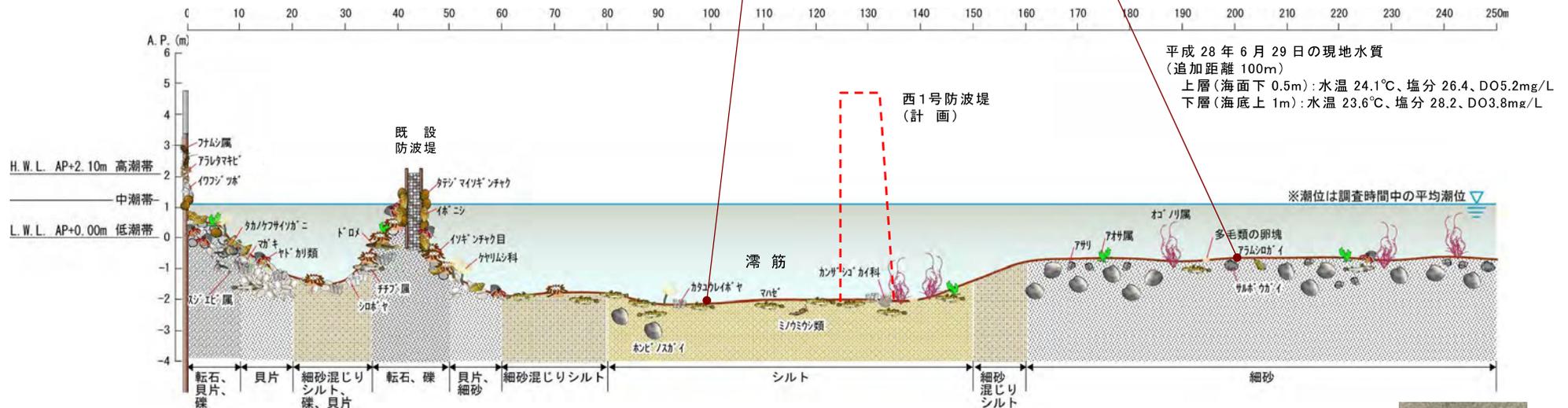
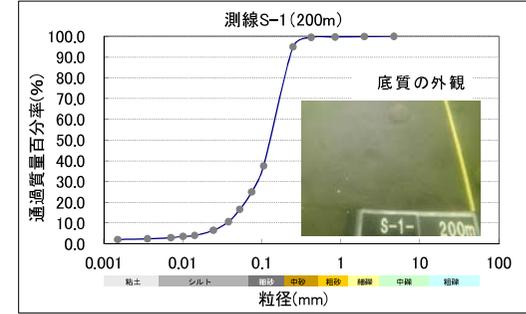
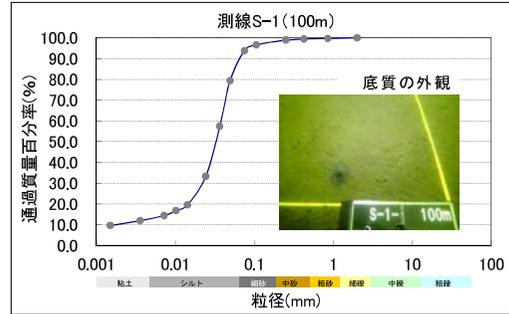
海底観察結果に基づく海生生物分布状況模式図 測線 S-1(春夏期調査:平成 28 年 6 月 29 日、30 日実施)



既設直立護岸及び潮間帯生物調査の実施状況



既設直立護岸中潮帯:イワフジツボ、フナムシ属、イボニシが確認された。



直立護岸の中潮帯付近で確認されたイボニシ、イワフジツボ



護岸直下の転石(根固石)の間隙で確認されたタカノケフサイソガニ



追加距離 40m の既設防波堤根固め石で確認されたドロメ



滞筋底部にあたる追加距離 100m 付近海底上の硫酸還元菌



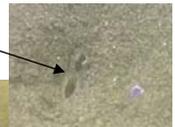
追加距離 160m 付近で確認されたカタウレイボヤ、イソギンチャク目



追加距離 200m 付近で出現したマハゼ



追加距離 220m 付近で確認されたホンビノスガイ



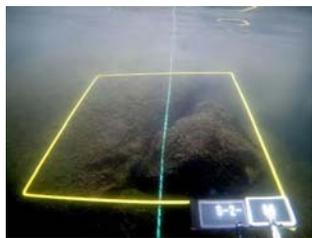
ホンビノスガイ
潜砂時の水管

既設の護岸直下及び防波堤の壁面にはフジツボ類、イボニシ、ヤドカリ類、タカノケフサイソガニなどの潮間帯生物が生息している。水深の深い航路の底部(追加距離 20~30m)や、滞筋底部(追加距離 90~140m)は泥っぽいシルト質の底質で、魚類など移動性の生物が確認されるが貝類などの生物は少ない。100m 付近では底質が嫌気性であることを示す硫酸還元菌マットが確認された。追加距離 160m~250m は細砂質の底質で、アサリやホンビノスガイが多数確認された。

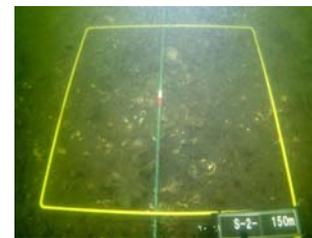
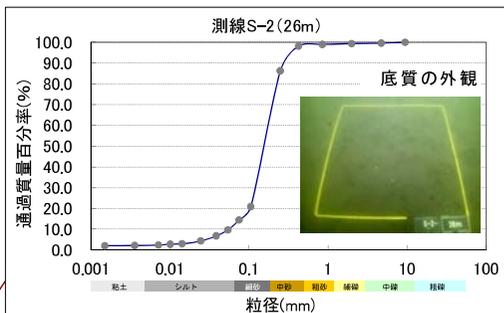
海底観察結果に基づく海生生物分布状況模式図 測線 S-2 (春夏期調査:平成 28 年 6 月 28 日実施)



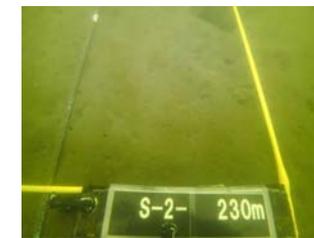
石積み護岸(平成 18 年施工)及び潮間帯生物調査の実施状況



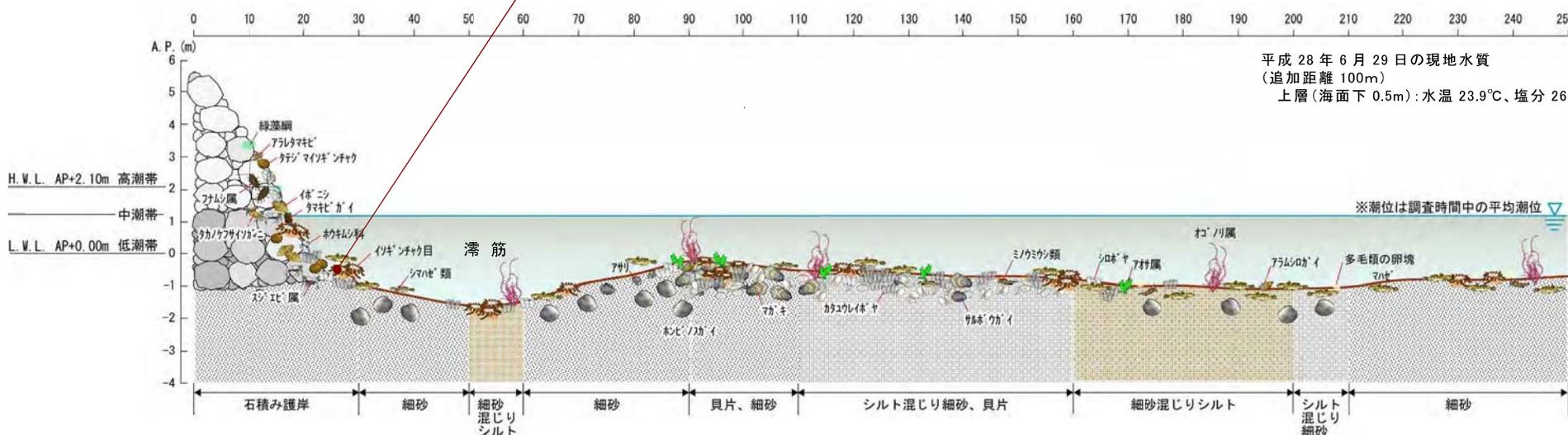
石積み護岸中潮帯:石の間隙にイボニシ、スジエビ属などが確認された。



追加距離 110~160m では貝片が混じる細砂の底質



追加距離 210~250m は細砂の底質



石積み護岸の高潮帯付近で確認されたアラレタマキビ



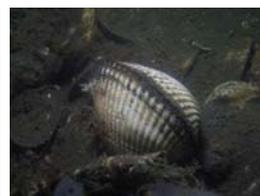
石積み護岸の中潮帯付近の石積み間隙で確認されたイボニシ、タカノケフサイソガニ



追加距離 80m 付近のホンビノスガイと、その殻に附着するアサリ(潜砂している貝を取出し撮影)



追加距離 90m 付近に密生するマガキ(被度 80%)と、イソギンチャク目、海藻類のアオサ属



追加距離 140m 付近で確認されたサルボウガイ



追加距離 170m 付近で確認されたマハゼ



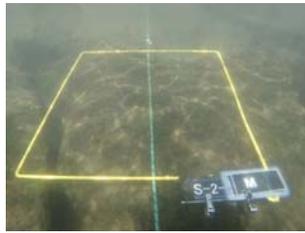
追加距離 240m 付近で確認されたミノウミウシ類

石積み護岸の潮間帯には、アラレタマキビ、イボニシタカノケフサイソガニなどの潮間帯生物が生息している。追加距離 60~70m の滞筋底部はシルト質の底質で貝類などの生物は少ない。石積みのり先付近及び 80m より沖合 250m までは、一部シルト質の底質を除き細砂質の底質で、アサリやホンビノスガイ、魚類のマハゼが確認された。また、追加距離 80~160m では貝片が堆積しホヤ類が着生し、80~90m には貝片にマガキが高被度に着生している。

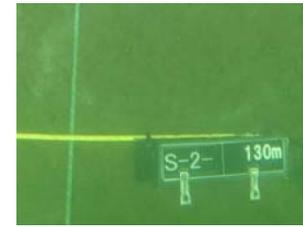
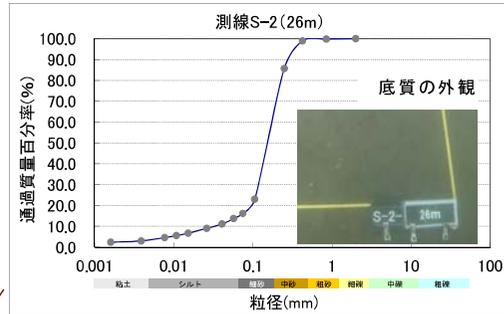
海底観察結果に基づく海生生物分布状況模式図 測線 S-2(秋期調査:平成 28 年 10 月 31 日、11 月 2 日実施)



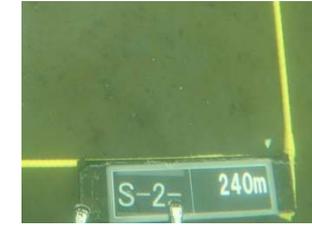
石積み護岸(平成 18 年施工)及び潮間帯生物調査の実施状況



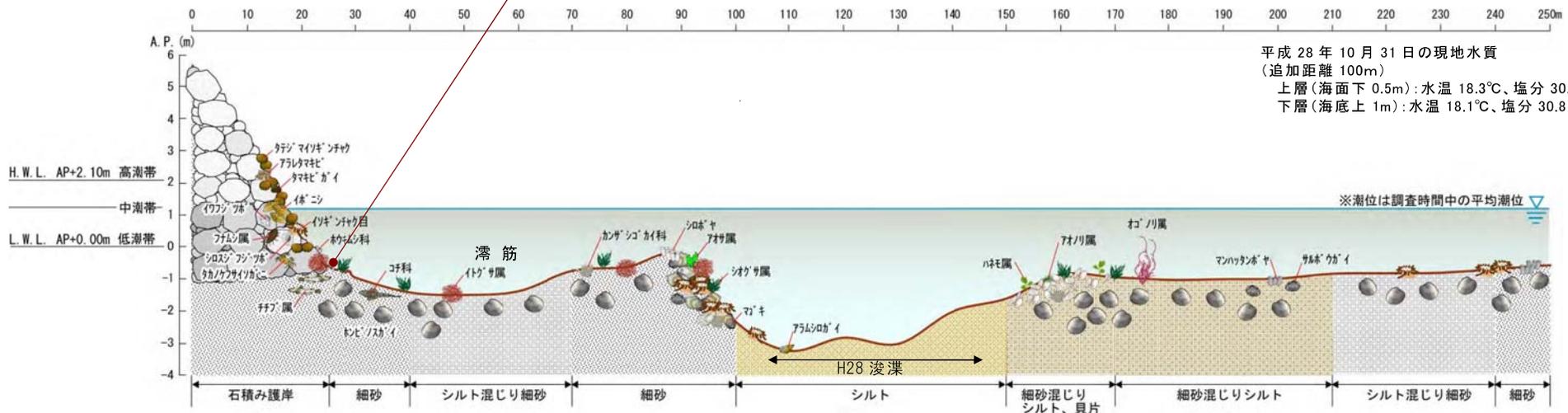
石積み護岸中潮帯:石の間隙にイボニシなどが確認された。



浚渫が行われた追加距離 130m 付近の底質はシルト



追加距離 240m は細砂の底質



平成 28 年 10 月 31 日の現地水質
(追加距離 100m)
上層(海面下 0.5m):水温 18.3°C、塩分 30.6、DO6.3mg/L
下層(海底上 1m):水温 18.1°C、塩分 30.8、DO5.4mg/L



石積み護岸の低潮帯付近で確認されたタテジマイソギンチャク



石積み護岸の低潮帯付近で確認されたホウキムシ科



追加距離 80m 付近のホンビノスガイと、サルボウガイ



追加距離 90m 付近に密生するマガキ(被度 60%)



追加距離 150m 付近で確認されたアオリ属



追加距離 160m 付近で確認されたホンビノスガイ



追加距離 190m 付近で確認されたサルボウガイ

石積み護岸の潮間帯には、アラレタマキビ、イボニシなどの潮間帯生物が生息している。石積みのり先付近から追加距離 80m 付近まではシルト混じり細砂、細砂質の底質でホンビノスガイが確認された。今年度浚渫が行われた範囲(追加距離 105~145m)はほとんど生物は確認されなかった。その沖合い追加距離 150m~250m は細砂混じりシルト、シルト混じり細砂、細砂質の底質で、ホンビノスガイが多数確認された。

4.平成29年度モニタリング調査計画

平成29年度は工事に伴い周辺海域では濁りの発生が予測されるため、水質調査を継続する。また海生生物の生息基盤である底質についても影響を把握するため調査を継続する。

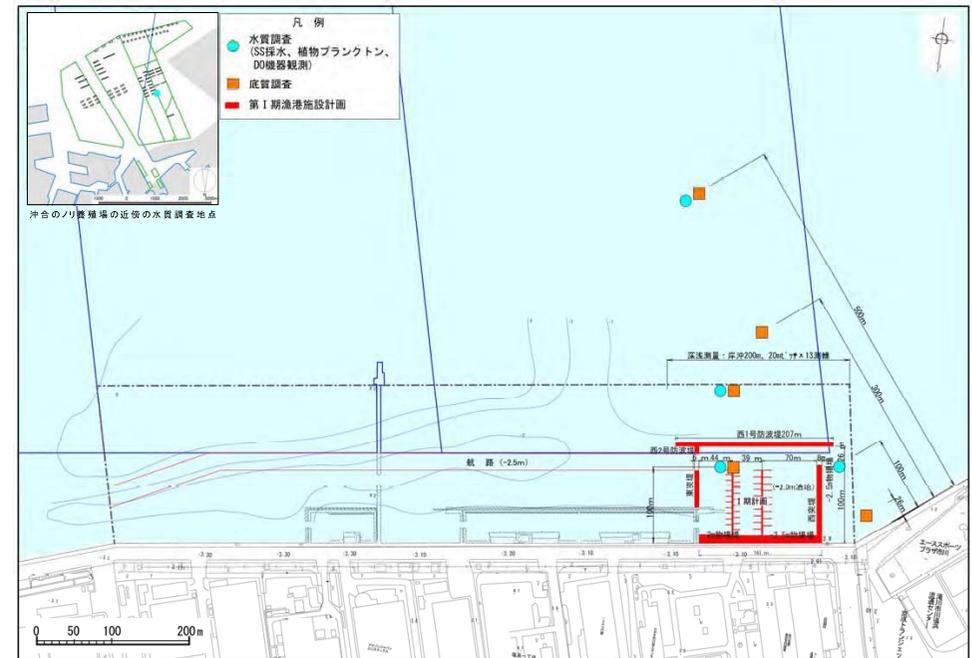
なお、地形、海生生物については、第I期の工事完了後の平成33年度に調査を実施する。

モニタリング項目表

	工事着手前 (H28年度)	工事中 (H28-32年度)	工事完了後 (H33年度)
地形	○		○
水質	○	○	○
底質	○	○	○
海生生物	○		○

調査計画一覧表（平成29年度）

調査項目	調査時期	調査の目的	調査方法	数量（調査1時期あたり）
水質調査	春夏期(6月頃) 及び 秋期(10,11月頃)	施工中の濁りによる水域環境への影響の把握	採水(浮遊物質SS,植物プランクトン)分析及び、機器観測(水温,塩分濃度,濁度,DO)	測線S-1上の100m,200mの2地点 測線S-2上の100m,500mの2地点 沖合のノリ養殖場の近傍1地点 計5地点
底質調査	春夏期(6月頃) 及び 秋期(10,11月頃)	海生生物生息基盤である底質の施工前後の変化状況の把握	採泥器による採取・分析 分析項目:粒度組成、COD、全窒素、全リン、全硫化物、強熱減量	測線S-1上の100m,200mの2地点 測線S-2上の26m,300m,500mの3地点 計5地点



平成29年度モニタリング調査位置図

今後の三番瀬再生の進め方(案)

三番瀬については、平成18年度に「三番瀬再生計画基本計画」を策定し、これまで10年以上にわたり3次の事業計画に基づき、三番瀬に特化させる形で事業を進めてきたところです。

今年度は、第3次事業計画の最終年であることから、各事業の進捗状況を把握して、事業計画の評価(案)を策定するとともに、今後の事業の進め方について検討を行いました。

その結果、継続する事業については、県がそれぞれの分野で行う施策の中で実施していくこととし、次期事業計画は策定しないものとします。

については、29年度以降の三番瀬再生の進め方は下記のとおりとします。

1 三番瀬再生基本計画

基本計画は、三番瀬の再生の理念と目標を定めたものであるため、今後も継続していきます。

2 三番瀬再生計画の事業計画

第3次事業計画には、「計画終了時の平成28年度末には、三番瀬再生計画を策定してから10年を経過することも踏まえ、三番瀬に特化した取組に一定の目処をつけ、以降は県がそれぞれの分野で行う施策の中で対応することについて、検討していく」との文言が記載されています。

そこで、全29事業の第1次事業計画からの11年間の取組結果や現状と課題を把握し、今後の方向性や事業の必要性等を検討した結果、終了が2事業、継続が27事業となりました。

継続する27事業については、各分野の施策の中で進めていくことができるため、次期事業計画は策定しないこととします。

3 三番瀬専門家会議

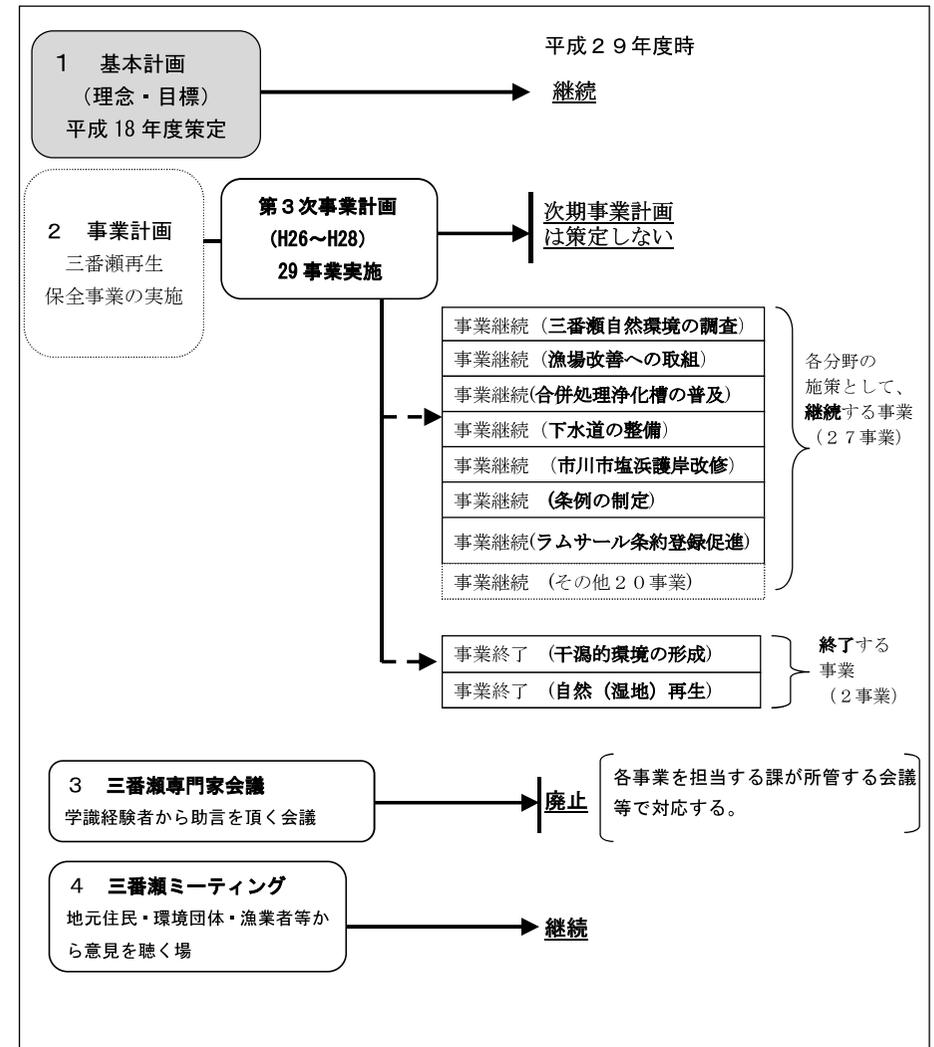
事業計画の推進にあたり、学識経験者から助言等を受けることを目的に設置したのですが、次期事業計画は策定しない方向であるため、廃止することとします。

なお、今後、専門家の助言を必要とする事項がある場合は、各事業を担当する課が所管する他の会議等で対応することとします。

4 三番瀬ミーティング

地元住民や漁業関係者等から広く意見を聴く場として設置されたものであるため、29年度以降も継続して、開催していきます。

方向性のイメージ図



今後のスケジュールについて

- ・10月に開催予定の三番瀬専門家会議及び三番瀬ミーティングにおいて、第3次事業計画評価(案)、29年度以降の進め方(案)を公表する。

※10月26日(水)三番瀬専門家会議、10月29日(土)三番瀬ミーティング開催予定